

## 二十九、 顕明清白

浄土は国土も清浄であり、仏も清浄であり、菩薩もまた清浄である。ゆえに天親論主は「彼の世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり」と、莊嚴清浄功徳を讃嘆せられ、鸞師は「此の二句は即ち是れ第一の事なり。」と言ひ、また「此の清浄は是れ総相なり」と嘆ぜられる。

浄土の三嚴二十九種というも、ひつきょう、この清浄功徳にほかならないのである。ゆえに総相と言われ、また第一の事と言われるのである。

「彼の仏の国土は、清浄安穩にして微妙快樂なり。」と大經には説かれる。浄土は「畢竟安樂大清浄処」である。清浄功徳をおいてほかに浄土はない。この浄土の清浄功徳を人生に顕明するものすなわち菩薩大士である。

人間の現実は一切すべて、不浄そのものである。されば曇鸞大師は「三界を見そなはずに、虚偽相、輪転相、無窮相なり。」と説かれる。虚偽の煩惱(惑)を体として、輪転相(業)すなわち六道輪廻の業を造り、生死に往来して無窮の苦を受ける(苦)。この虚偽相、輪転相、無窮相こそは、穢惡汚染、雜毒不浄の凡夫衆生の始終である。

かくのごとき人間の世界の汚さは、ただ如来清浄の本願力によつてのみ無限に浄化せられる。生死海は彼岸の清浄功徳によつてのみ、無限に聖化せられる。この一切の惡を、転惡成徳せしむる自然法爾の信の世界こそ、聖人の宗教の本質であった。しこうしてかかる信は清浄そのものなるがゆえに、善導大師は「清浄願往生心」と言われ、わが聖人は「金剛の眞実心」と言われたのである。

穢惡汚染の罪業は清浄なる大法のみ無限に浄化する。

しかるに、かかる救いの宗教において、陥りやすき二つの誤がある。

一つは、清浄の大法を、清浄の大法として無我に領解せず、己が不浄を不浄と知らざるがゆえに、大法すら、不透明なる不純なものと考えることである。

一つは、法の清浄眞実を主張するのあまり、やがて、自己自身すら不知不識の間に清浄なりと考えるに至ることである。

大法は清浄にして一点の濁りなきものなるがゆえに一切衆生の濁惡の迷妄を覺ますのである。法蔵の本願清浄であり、弥陀の法身清浄であり、応化の釈迦世尊清浄であり、その清浄なる教法を領解してさらに説き開きたもう菩薩大士の教法また清浄である。七祖、聖人はすべて「清白を顕明」して、愚鈍のわれらをして、法の清浄を清浄として領解せしめんがために出でたもうたのである。

されば時に、これら先聖の一言半句の法門すら、これを無視せるがために、その領解の心中を不純ならしめて、清白の大法を、清白たらしめぬことがある。

「たとひなき事なりとも人申し候はば当座領掌すべし、当座に詞を返せば再び言はざるなり。」

これは蓮如上人の慈訓である。この求道上の一句の心得生きぬがため、時に多くの同行、善知識すら棄てることあり、一生人に糞除けにせられることあり、あるいはついに、一生涯頭の下らぬ人がある。この人の信ずる法は混濁して、この人を救わず、世をもまた救わない。さればあらゆる角度より、教えを聞いて、機の愚悪に徹するとともに法の清白を領受すべきである。

大法は尊厳にして清浄である。

しかるに人間の濁悪の微塵すらも、これを大法の上におおわんか、大法は曇り、清浄は濁る。大法濁る時、救いもまた濁る。

濁悪の機のはからいが法を求めるとき、必ず割引されたる法を求めて、凡夫の要求に妥協するものを真実と誤る。かかるいわゆる同行と、説教者との間に成立つ甘き妥協を救いと誤るがとき世界には、ついに真実の救いも自覚も成就はしない。老いたる真宗同行の群、時に長歎息を発せしむる。

大法の尊厳を尊厳とし、大法の清浄を清浄とする時、いかにも、廻りくどく、縁遠いもののごとくである。

「光明団の言うことはあまりにきれいすぎる。おれたちはついて行けん。」

「あれは聖道門だ。浄土真宗は、このままでええのだ。」

こうしたことを言う人があまりにたくさんである。清浄なる大法によつて救われるかわりに、われとわが悪心を許し、清白の法を濁らして、真の自覚を厭い、如来を盲目にし、大法を曲げて、安価なる自己弁護を続ける。幾十年寺参りを続けるともいまだ救われず、心硬化していよいよ大法受け入れがたく、かえつて大法の園を汚して慚愧せず。まことに心すべきである。

己によつて大法をまげず、合掌して大法のままを頂戴すれば、大法は必ず極悪の胸中に徹して極悪を知らしめ、破るべきを破り、壊すべきを壊して、清浄なる大信を成就したものである。

清浄なる法の園には、集まる人は少いかも知れぬ。しかしそこに集まる人のみ一粒千万金の人である。

尊厳清浄なる大法をそのままに頂く者は、遅きに見えて速く、窮屈に見えて広く、つらそうに見えて楽しい。

大法を曲げ、割引する者は、遠きに似て遅く、広きに似て狭く、楽しきに似て灰色に曇る。

正法は正見すべきである。大法に対する認識の不足は、直ちにその生活の上に出る。

正法尊厳にして清浄なるがゆえに、よくいかなる衆生も救われるのである。正信の世界は清浄である。